

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校 実施報告書

【都道府県】 宮城県

【学校名】 学校法人朴沢学園 仙台大学

【テーマ】 ① II III IV V

- I オリンピズムの教育的価値
- II おもてなし精神とボランティア
- III パラリンピックと障害者スポーツ
- IV 日本文化と異文化・国際理解
- V スポーツを楽しむ心

【実践研究タイトル】

オリンピック・パラリンピック関係者によるジュニア世代への動機づけを通じた次世代のスポーツ人材育成

【実施学年、部、講座等】

宮城県南地域の小学生ほか保護者約 270 名（うち小学生 60 名）

【目的・ねらい】

【目的と内容】

1. アマチュアスポーツの強化を図る上で、ジュニア世代への動機づけは不可欠の課題である。そのため、東北唯一の体育大学としてオリンピック・パラリンピック関係者からスポーツの素晴らしさを体験や講話を通して伝える。
2. 2020 年東京オリンピックを目指すジュニア、または次世代を担う子どもたちを対象に、オリンピックに関わった選手や指導者の講話による啓蒙活動を実施し、子どもたちへ動機づけを図ることでスポーツに関わる人材の発掘に寄与する

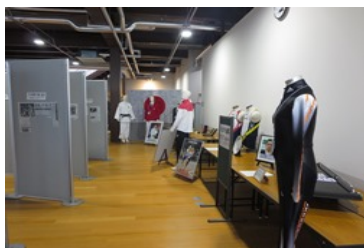
【種類】（当てはまるものに○）

- ・各教科（ ） ・道徳 ・外国語活動 ・総合的な学習の時間 ・特別活動
- ・教科以外での取組（ ）

【実践内容等】

（実施内容） ※適宜、様子を示す写真、図表、記録を含めてください。

1. 本学で平成 28 年 10 月 9 日（日）～10 日（月）に同時開催したイベントの「東北こども博」「スポーツフェスティバル in 柴田」「仙台大学 大学祭」において、これまでのオリンピック・パラリンピックを紹介したブースと映像により、啓蒙を図った。本会場はスタンプラリーのチェックポイントに指定して参集するジュニア世代へ、学生が実際に使用したオリンピック・パラリンピック関連のユニフォーム等を紹介した。
2. 展示物のほか、学生によるスケルトンやボートの練習器具を使用した簡易のスポーツ体験を実施した。



3. 外部および本学のオリンピック関係者をトークショーのイベントへ招待し、その模様を学内大型スクリーンや学食で中継して広く「東北こども博」へ来場したジュニア世代に公開した。内容はマスコミ7社により新聞・TVニュースで紹介されたほか、地元ラジオの番組でも取り上げて放送した（平成28年11月27日）。現在、いつでも放送内容を確認できる地元ラジオ局の「ラジコ」（アプリ）を活用している。こうした取り組みを通じて、大学や柴田町内のみならず県内に向けて当該活動の情報を発信した。

【トークショー】

1. 夏季オリンピック関連

(1) テーマ「リオデジャネイロ オリンピック金メダルへの挑戦」

(2) 出演者

A. 南條充寿：2016 リオデジャネイロ・オリンピック全日本女子柔道代表監督

B. 田知本遥：2016 リオデジャネイロ・オリンピック女子柔道 70Kg 級 金メダリスト



2. 冬季オリンピック関連

(1) テーマ「冬季オリンピックをめざして」

(2) 主演者

A. 黒岩俊喜：仙台大学大学院：2014 ソチ・オリンピック ボブスレー競技日本代表選手

B. 郷内 翔：岩沼中学校：第2回リレハンメル冬季ユースオリンピック スケルトン競技日本代表選手

（郷内君は宮城県のタレント発掘事業「宮城ジュニアトップアスリートアカデミー」出身者であり、最年少で日本代表選手となった）



（実践上の工夫点、留意点等）

1. イベントを同時開催としたことで集客力を上げ、各イベントのパンフレット内に記載して広く配布した。
2. マスコミ7社により新聞・TVニュースで紹介されたほか、地元ラジオの番組でも取り上げて放送した（平成28年11月27日）。現在、いつでも放送内容を確認できる地元ラジオ局の「ラジコ」（アプリ）を活用していることで継続的啓蒙が可能である。こうした取り組みを通じて、大学や柴田町内のみならず県内に向けて当該活動の情報を発信した。ほか、地元ラジオ局の番組に出演している仙台大学教員による事前の一言宣伝も実施した。
3. 宮城県教育事務所、仙台市を含む県南の教育委員会を通じて、各市町の小学校にチラシ宣伝を実施し、「東北こども博」に子供たちを集めた。（2日間で19,100人来場）
4. 仙台大学内で実施するトークショー形式で企画したことから、ステージ全面は子供たちが床に座って聞けるようにできたほか、仙台大学ジュニア柔道塾の児童など本学をよく知る子供たちが入場しやすい、学生の協力も得やすい環境で実施できた。



（成果）※児童・生徒の学習効果、意識変容等の効果について、可能な範囲でアンケート結果等概要を記入してください。

1. オリンピアンを間近に見ることで、子供たちは飽きることなく真剣に聞き入っていた。子どもたちは、最後の学長挨拶で、「将来のオリンピックになる子供たち」と声掛けされ時には真剣な顔つきになっていた。
2. オリンピアンから、「嫌になるくらい基礎をやった。そのおかげで強くなった。」との発言に、真剣に聞き入る子供たちの姿は印象的であり、あきらかに意識の変容が見られた。
3. イベント終了後も、情報発信できる仕掛けとなっているので、継続的啓蒙が可能な環境を残した。

【オリンピック・パラリンピック教育の実施に伴う課題点】

※オリンピック・パラリンピック教育の継続的な展開に向けて、実践を通して得られた課題点がございましたら、自由に記述してください。

今回はイベントを利用した啓蒙活動であったため、その効果測定が難しい一方で、レバレッジの効いた活動を実践することができた。今後は如何に郷内君のようなアスリートを発掘するかが大きな課題である。

しかし、当初の啓蒙活動は点ではなく面で行うことは重要であり、子供たちに広くアスリートにあこがれる、または目指すための動機づけが大切であるため、今後もマスで対応できる活動の継続を目指したい。